

## まえがき

本書の書名にある、このルビ風の『「もの」の「ことわり」』は、もちろん正しいルビではない。それではなぜ物<sup>「もの」の「ことわり」</sup>理<sup>「もの」の「ことわり」</sup>と書いたのか。「看護・介護と物<sup>「もの」の「ことわり」</sup>理<sup>「もの」の「ことわり」</sup>」の接続詞を「と」にした背景も含めて少し説明したい。

著者は北海道立網走高等看護学院で「物理学」の講義を11年間担当している。

物理学は「看護技術」・「解剖生理学」・「運動器」・「臨床放射線医学」などと密接な関係を持っており、各科目の科学的根拠を形成するのに不可欠な基礎科目である。しかし、このことに最初から気づく学生はきわめて少ない。最初の授業で「物理学」に対するコメントを求めると、物理は難しかった（高校で履修した人）、難しそう（高校で履修していない人）、なぜ物理学を受講するのか、という声が上がってくる。そこで、点滴や体位変換介助などの事例をあげ、本質に係る質問をしたり、実演してもらったりすると、暗記やマニュアルが通用しないことに気づいて表情を曇らせ始める。頃合いをみて、何事も、事象・現象（→もの）の根拠・仕組み・原理（→ことわり）をしっかりと理解しないとすぐに限界につきあたり、それを超えて先に進むことができない、と説くと真剣に耳を傾ける。

次に「と」について述べたい。看護系の物理学の本の書名にある「看護系のキーワード」と「物理学」を接続する詞に注目するとその本が物理重視型か看護・医療技術重視型かがわかる。正に“名は体を表す”のとおりであるから面白い。物理重視型の本は物理学をきちんと学ぶのに適しているが、紙数の関係で看護・医療技術に関係する内容は量的に少ない。カリキュラムのコンセプトを忠実に実践するために物理重視型の本で授業を進めると学生は不本意ながら暗記主義で対応することになる。一方、看護・医療技術重視型は学生の受けは良いが『「もの」の「ことわり」』をきちんと学ぶには難がある。

このような行き詰まりを打開するために本書を企画、執筆した。ポイントは物理重視型と看護・医療技術重視型の長所を両立させて“良いとこ取り”したことである。そして“両立”を図った結果、接続詞は自然に「と」に落ち着いた。

本書の特徴は無論、書名ばかりではない。当初は“物理”と聞いて表情を硬くしていた学生から「根拠が分かって自信がついた」との言葉が出てくることを励みにして続けた11年間の授業。この間に蓄積した、物理と「看護技術」「解剖生理学」「運動器」「臨床放射線医学」などの間をつなぐ話題・題材はかなりの量に達した。本書の特徴は、看護・医療系の題材の豊富さ、的確な図解、142問のQ&Aにある。

- ・看護・医療系の適切な題材は、物理を好きにさせる。
- ・的確な図解は本文の本質を理解させ、それを右脳に定着させる。
- ・豊富なQ&Aはバラバラになりがちな知識をつなぎ、知恵を生み出す力を養う。

また各章の扉には、その章のエッセンスを有機的につないで端的に示した。これから何を学ぶのかを直感的につかんでもらうためであるが、学んだ後に見直すと新しい発見があるはずである。それをイラスト中にある空白の○などに書き込むことを勧めたい。

各ページの左右の余白は、本文から知的刺激を受けて氷解した疑問、思いついたアイディアなどを書き込むために設けてある。余白を自分の言葉で埋め尽くし、「私はこの本で、知識を知恵に変える力を身に

つけ、仕事・使命に取り組む自信をつけた」と言える、世界に1冊しか存在しない本に仕上げよう。

物理をしっかり学びながら看護・医療分野への応用力を身につけられる本の企画を高く評価し、ともに練り上げてくれた秀島功氏（三共出版）、この企画が反映された原稿の編集業務を、東日本大震災発生以降も遅滞させないよう献身的に努力してくれた飯野久子氏（三共出版編集部）、および著者の企画・執筆意図を的確につかんで図解してくれた山口摩美さん（国立大学法人北見工業大学 平成20年度入学生）に心から感謝します。

平成23年 海明けの頃

著 者